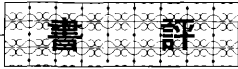


Title	Wolfgang Schwentker, Max Weber in Japan : eine Untersuchung zur Wirkungsgeschichte 1905-1995
Sub Title	Wolfgang Schwentker著 Max Weber in Japan : eine Untersuchung zur Wirkungsgeschichte 1905-1995
Author	小林, 純
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1999
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.92, No.1 (1999. 4) ,p.236- 239
JaLC DOI	10.14991/001.19990401-0236
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19990401-0236">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19990401-0236</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



Wolfgang Schwentker,

*Max Weber in Japan : eine Untersuchung  
zur Wirkungsgeschichte 1905-1995*

Tübingen : Mohr Siebeck, 1998

I

本書は、ドイツ人歴史家による「日本におけるヴェーバー受容過程」を総括的かつ本格的に跡づけた研究である。1953年生まれの著者シュヴェントカー氏はすでにドイツ史の領域で学位論文を刊行しているが、その彼がこのテーマで大著をものした理由がふるっている。本書の成立事情から紹介しよう。（以下、敬称略。ページをS-で示す。）

1981年、ドイツのモール社はヴェーバー全集刊行のパンフレットを作成し、そこに編集委員である社会学者シュルフターの論稿を載せた。84年に刊行が始まる。当時企画に関係した全員が驚いたことに、最初の巻の販売部数の三分の二はドイツでもアメリカでもなく、日本に吸収された。これは現在までほとんど変わらない（S.307）。85年のシュルフター来日もこの衝撃的な事実があつてのことだと評者は仄聞する。著者は88年に出版者G・ジーベックとの会話で全集に対する日本の注目すべき反応を知って興味を抱き、ここから「なぜ、どのようにして、日本の科学はヴェーバーの著作を我がものとしたか」の研究を始めることになった（S.IX）。編集委員である師W・モムゼンの勧めもあったとはいえ、この時点で著者には日本研究および日本語の知識はなかった。その後の著者の努力は驚嘆に値する。89-91年に立教大学に客員研究員として滞日、日本語習得、文献収集お

よび解説にはげみ、のちオクスフォードで1年、やはり客員研究員として滞在して第1章を書いた。本書の草稿が96年初めにデュッセルドルフ大学に職位請求論文として提出されたから、ほぼ7年弱でこれだけの成果を挙げたことになる。その広がりとおおよそは、以下に掲げる目次からもうかがえるであろう。

序論

- I. ヴェーバーの著作におけるテーマとしての日本——受容の出発点？
  - II. ヴェーバー受容の開始1905-1925
    - 1. 1900年頃の日本の社会と「社会科学」
    - 2. 日本の経済学者によるヴェーバーの「発見」
    - 3. 大正後期におけるヴェーバー研究の端緒
  - III. 著作の発見1926-1945
    - 1. 精神的相互作用：戦前期独日文化科学者の外国滞在
    - 2. マルクスの影に。1930年頃の日本社会科学の中のヴェーバー
    - 3. 「求道者」ヴェーバー。半絶対主義軍国主義下の受容1936/7-1945
  - IV. 日本の「第二の開国」局面のヴェーバー研究
    - 1. 政治—社会的出発状況と文化的環境
    - 2. 戦後初期のヴェーバー解釈（1945-1955）
    - 3. 近代主義者とヴェーバー
    - 4. 日本のヴェーバー研究に対するアメリカの影響
    - 5. 在庫調べ。1964年12月東京のヴェーバー・シンポジウム
  - V. 1970年以降のヴェーバー「ルネッサンス」
    - 1. 国際的前提
    - 2. 足跡を追う。日本人研究者のドイツ旅行と伝記への新たな関心
    - 3. 石切場の作業。日本における社会・政治思想の「古典」としてのヴェーバー
  - VI. 結語
- 付録には日本近代「年表」と有益な「ヴェーバーの著作の日本語訳年表」、40ページにわたる資

料・文献」, 索引が付されている。

## II

日本に初めてヴェーバーの名が表れたのは、1905年に福田徳三が『国家学会雑誌』で同年のドイツ社会政策学会の議論を紹介した論説で、次が1910年の河田嗣郎の『資本主義的精神』だという。20年代に入って大内兵衛が著作の全体像を伝えた。邦訳は、福田以来ドイツ学導入の進んでいた東京商科大学の鬼頭仁三郎訳「限界効用学説と精神物理学の基礎法則」(1924)に始まる(S.75-89)。26-7年には阿部勇が中世都市論、倫理論文を検討して、ヴェーバー社会学の歴史次元を初めて旨くつかみ出し、それは後の社会学者たちによって取り入れられた。著者はこの点を日本のヴェーバー解釈の一つの重要な特徴と見ている(S.133-4)。戦間期の日独交流では、E・レーデラーのヴェーバー批判、三木清の『社会科学概論』、尾高朝雄のフッサールとケルゼンを介したヴェーバー批判、K・レーヴィット、大塚久雄への影響を軸にK・ジンガーが取り上げられる。

こうして始まった日本のヴェーバー研究は戦時中も止むことなく続き、戦後の周知の「近代主義者」大塚、丸山眞男、川島武宜の成果に至る。プロテスタンティズムの機能的等価物を求めた土屋喬雄の経済道徳の研究は1954年、ペラー『徳川時代の宗教』の3年前だ。著者はこれを「日本の研究が時代の先端にあること、欧米での重要な問題設定を先取りし、ないしそれと平行に展開したこと、だがその成果を言語的文化的孤立のため国際的議論へと持ち出せなかったこと」の一事例と見る(S.278)。

欧米の研究はこうした蓄積のある日本のヴェーバー研究を概ね知らずにいた。大塚の「資本主義の精神」論などごく一部が英・独訳で出されたにすぎぬ。逆に日本の研究者は「翻訳文化」に生きるという事情から利益をこうむってきた。初期のトニーから最近の「中心の問題設定」に関する

議論にいたるまでみな訳出され、それが国内の研究に影響を与えている。この非対称性を打開する試みとして93年3月、ミュンヘンで「日本とマックス・ヴェーバー」シンポジウムが生まれ、初めて日独の多数の研究者が集った。だが異文化コミュニケーションの溝はここでも深かった。この事態は、日本のヴェーバー研究が西洋の議論を時間差で追いかけてきただけのもではなく、20年代以来日本の歴史と社会の特殊性に由来する独自の問題設定を展開してきただけに、なおのこと惜しむべきことであった。それゆえ日本におけるヴェーバーの影響史を理解するためには、まず日本の歴史過程と受容の出発状況を概略的にでも明らかにしておく必要がある——こう著者は見た。

こうして著者は開国以来の近代史の基本像を「上からの革命」による徹底した近代化過程として、マクロ社会学の成果を用いて描く。日本は、民主的公共性の形成と個人主義の育成の点で失敗といえるものの、他の指標では近代化を成功裏に達成した。その日本では「伝統的日本と近代的西洋」の図式が非常に強調されたことが指摘される。テーマとの関連では「1925-45年の政治的民主化の遅れに起因する近代化の危機があったにもかかわらず、日本はなぜ近代モデルへの適応がかくも早く、上首尾にいったのか」という問題が、ヴェーバーの著作を重要なものとして受容した日本近代化の二律背反的特質を表現するものとして示される(S.14)。

受容の一般論として、端緒は様々であれ、個々の科学領域への影響がその国・時代の政治的社会的条件に強く規定されたであろう、との当然の指摘のあと、著者は欧米各国およびそれ以外での影響史に触れる。これと対比される日本の影響史は、丸山眞男、住谷一彦、内田芳明、茨木竹二らの整理を紹介しつつ描かれる。その特性を示す2点を評者の恣意も交えて掲げておく。まず第一に、日本では経済学によるヴェーバー発見のあと、昭和期には社会学での受容が続き、日中開戦までに価値判断問題、社会政策論、アジア社会分析、「倫

理」と日本資本主義の形成を軸に研究され、特筆すべきことに、この流れが戦時中も中断されずに、理論社会学、法社会学、行政学、経済学と多岐にわたって進められた。そして戦時中には価値判断問題と理念型、宗教社会学、民族国家と権力国家が重要テーマとされたことが指摘される。第二は日本資本主義論争との関連である。マルクス主義的諸範疇を用いた分析の中で、講座派の論者が日本資本主義の歴史的個性を規定するのにヴェーバー的な質をもった理念的補助構成を稼働したこと、また30年代に宗教社会学を用いてアジア研究を行ったことにより、マルクスとヴェーバーを対抗軸とのみ見る西洋人には特異に映るマルクスとヴェーバー的問題意識との重畳が現れた。これは戦後の大塚の比較経済史研究にもつながっている。その系論として、「半封建的資本主義と市民社会」対比図式や方法論としての「マルクスとヴェーバー」問題が戦後に重要論点となっていたことも挙げられよう。

以上の日本での研究史も参照しつつ、著者は二つの関連する問題関心を記す。それは1：われわれは日本の社会学者からヴェーバーについて何を学び得るか。別言すれば、日本に典型的なヴェーバー像というのは存在するか。そして2：われわれは日本のヴェーバー研究を手がかりに日本自体について何を学び得るか、というもので(S.33, 342)、この関心のもとに著者は影響史の四段階を設定する。これが本書のII～V章に対応する。すなわち1)日本の経済学によるヴェーバーの発見、2)社会学の制度化にともなう理解深化、3)「第二の開国」以降のアメリカ化、4)70年以降のいわゆるヴェーバー・ルネッサンス、である(S.342-51)。

### III

この作業を通して得られた著者の基本的命題は序論で以下のようにまとめられている。1920年代以来ヴェーバーの著作が広範にして深い影響を日

本に与えたのは、日本の多くの社会・文化学者が、本国社会の近代の歴史を部分的近代化の一特殊事例として、ないしヴェーバー的に言えば、部分的合理化として解釈した、という事実の原因がある。彼等はヴェーバーの著作に、人間の発展が市民的契約社会の自律的人格へと理念的に打ち出されていることを読み、このヨーロッパ近代のモデルを本来の文化的な文脈から解き放って、それを方法および価値理念として日本社会史の分析へと適用した。その象徴的な例が、中村勝巳編『マックス・ヴェーバーと日本』(みすず書房、1990年)である。ヴェーバーは、一つには、『科学論集』や『経済と社会』の範疇論によって、アジア的社会秩序の在り方をも分析するための概念的手段を提供した。もう一つには、日本の受容者たちは、彼の比較宗教社会学およびそこに展開された合理化観から近代の進化論を読み取り、これを手掛かりに日本社会における近代的一合理的要素と伝統的・非合理的要素の関連を把握しようとした。この領域では、例えば土屋のような「機能的等価物」の探索、より広くはアジア的文化圏という特殊条件下での日本資本主義の成立という問題の検討、また日本官僚制の権力強化が問題となる。またそれゆえ有機体論的国家イデオロギー(国体)の機能、ないし少なくとも1945年までは半絶対主義的天皇体制が問題とされる。ヴェーバー自身、われわれすべてを促えた近代化過程を、それが「その不可避性と全貌とにおいて初めて全体として姿を表した」時点まで体験した。この意味で日本の科学者たちにとってヴェーバーから発散される力には著しいものがあつた。ヴェーバーの著作と人物は、とくに日本の「近代主義者」に対し、呪術的・宗教的および政治的救済論の呪術の園からの脱出路を示し、過去と将来の世界を洞察する眼を開いてくれたのである(S.14-5)。

### IV

このような研究では、まず日本の歴史と社会

科学史の理解、そしてヴェーバーのテキストそのものの理解、そのうえで日本のヴェーバー研究の文献探索と解説、という作業が必要だ。言語障壁をのりこえ、類書 (S.22の注で触れられている Agnes Erdelyi, *Max Weber in Amerika*, Wien: Passagen Verlag, 1992 と較べて) を実証密度ではるかに凌駕する成果をあげた著者に心から敬意を表す。ページを繰っては教えられることばかり、己の不勉強を恥じ、内心忸怩たるものを覚えつつも一種の迫力を楽しむことができた。感想を煮つめて言うなら、「私にとって科学とは何か」、その科学に手を染める「私とは何者か」と問い詰められた思いである、となろうか。考えてみれば本書に登場する日本人のヴェーバー研究も、この問いに対する答の学問的な形象だったのではないか。またこのような受け止め方をする者がいるかぎりにはヤスパース的「ヴェーバー像」(S.179f.)の妥当性も存続しそうである。そしてこの問いへの答が、緊張をもった時代への対峙からなされたものならば、その学的形象も歴史に残るであろう。科学の制度化・分業化に伴い、専門領域の研究史も厚くなると、「斯学にとって私(の研究成果)とは何か」の側面のみが注目される。ただその研究主体の「私」一人一人が、実はまず、この科学をも含めた時代や社会と向き合って「私とは何者か」と自問する存在なのである。(大塚久雄『近代欧州経済史入門』講談社文庫版(1996年)に付された中村勝巳「解説」に描かれる日本人研究者の態度も、この問いをくぐってきているものと思いたい。)

こんな感想を持つ日本人として、著者の迫力に押されっぱなしでもいられず、ささやかな反論を試みたい。一つは「求道者」について。政治と科学的真理の追求とを分け、後者に沈潜する生き方を採るにあたりヴェーバーの科学論を支えたことから、求道者ヴェーバーの像が受容されたという。ただ、住谷悦治らが河上肇を求道者と呼んだように、この表現はマルクス主義者の方に当てはまるのではないか。弾圧にも屈せずに社会主義

を奉じて科学的真理を求めたとされる彼らこそ、確信倫理に生きる求道者と見られていたのではなかっただろうか。

もう一つは、安藤英治と折原浩の位置付けについてである。著者は、帝政期ドイツの精神世界におけるヴェーバーの位置からテキストを解説するという、いわばテキスト内在的な研究の存在に触れ、すべての日本人のヴェーバー研究が日本の状況に関連しているわけではないとして、この2名を例に挙げている (S.15)。安藤『ヴェーバー紀行』の扱いは著者もいささか困惑ぎみのようだが、そのヴェーバーな人格への執着は歴史的関心によるものではなからう。安藤はヴェーバーの特異な人格と思考様式のうちに、近代を突き詰めようとした精神の偉大さと悲劇を見た。彼は、日本の精神状況が「伝統と近代」のあいまいな共存を、それ自体が現代の一般的な在り方の一つだとして受け入れていることに一種のいらだちを覚えたのではないか。そして同時に、伝統から近代への移行を当為とすることで近代の悲劇に目をつぶることもできない、と感じた。こうした状況への違和感を安藤の研究動機に読めないだろうか。折原の一連の徹底したテキスト解説作業についても似たようなことが感じられる。「近代主義者」は、自らがヴェーバーの近代的思考とその学的成果と解釈したものによって日本の指針を示そうとした。だがヴェーバー自身は徹底した近代的思考の産物たる概念用具により、まさにその近代の危うさまでをも暴こうとしている。主観的意味の理解という独特な立場は、近代的「価値」の潜んでいそうな社会的形象の脱構築につながる質のものだ。折原はこのことを明らかにして、これを「近代主義者」の立場への批判として提出することができよう。こう解釈すれば、この二人の作業も、やはり日本の現状に関わったものと見るのでないだろうか。

小林 純

(立教大学経済学部助教授)